# Ⅰ　基本方針と菊川市茶業の概要

## 1 基本方針

### （1） 計画策定の趣旨と目的

菊川市は、深蒸し茶発祥の地としての誇りを持ち、全国的にも茶産地「お茶の菊川」として評価を受け、おいしい茶づくりに励んできました。平成 29 年度には、「菊川市茶業振興計画」を改定し、長い歴史と先人たちが築き上げた茶産地を持続し、引き続き、活力と魅力のある茶のまちをめざした取り組みを推進しました。

しかし、後継者不足や高齢化の進行により、茶園の耕作放棄地が増加傾向にあります。さらに、茶価の低迷など様々な問題に直面し、茶業を取り巻く情勢は年々厳しさを増しました。

お茶の消費が落ち込む中、令和２年からの新型コロナウイルスの影響を受け、さらなるダメージを受けましたが、ウィズコロナの時代に変わりつつあり、人々の生活のあり方は大きく変化しています。また、デジタル技術の導入が進むとともに、気候変動への対応やＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）の取り組みがこれまで以上に求められるなど、環境を重視する国内外の機運の高まりにより、農業分野においても地球温暖化防止と持続可能な生産体系への移行が求められるなど、新たな要因が加わったことで茶業の状況は急速な変化が求められています。

そこで茶産地菊川の生き残りをかけた新たな指針とするため、菊川市茶業振興計画を見直し、「菊川茶産地持続化計画」として策定することとしました。

「菊川茶産地持続化計画」は、本市の茶業の現状と課題を踏まえて、茶業振興のための基本方向に基づく施策体系を明らかにして実現を目指すものです。

＊SDGｓについて

平成 27(2015)年９月の国連サミットにおいて、先進国を含む国際社会全体の開発目標として「SDGｓ(持続可能な開発目標)」が採択されました。SDGｓは令和 12(2030)年までに世界中で達成すべき 17 の目標と具体的な達成すべき 169 のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない」社会の実現を目指しています。

本計画の策定と推進にあたり、SDGs の視点を取り入れています。

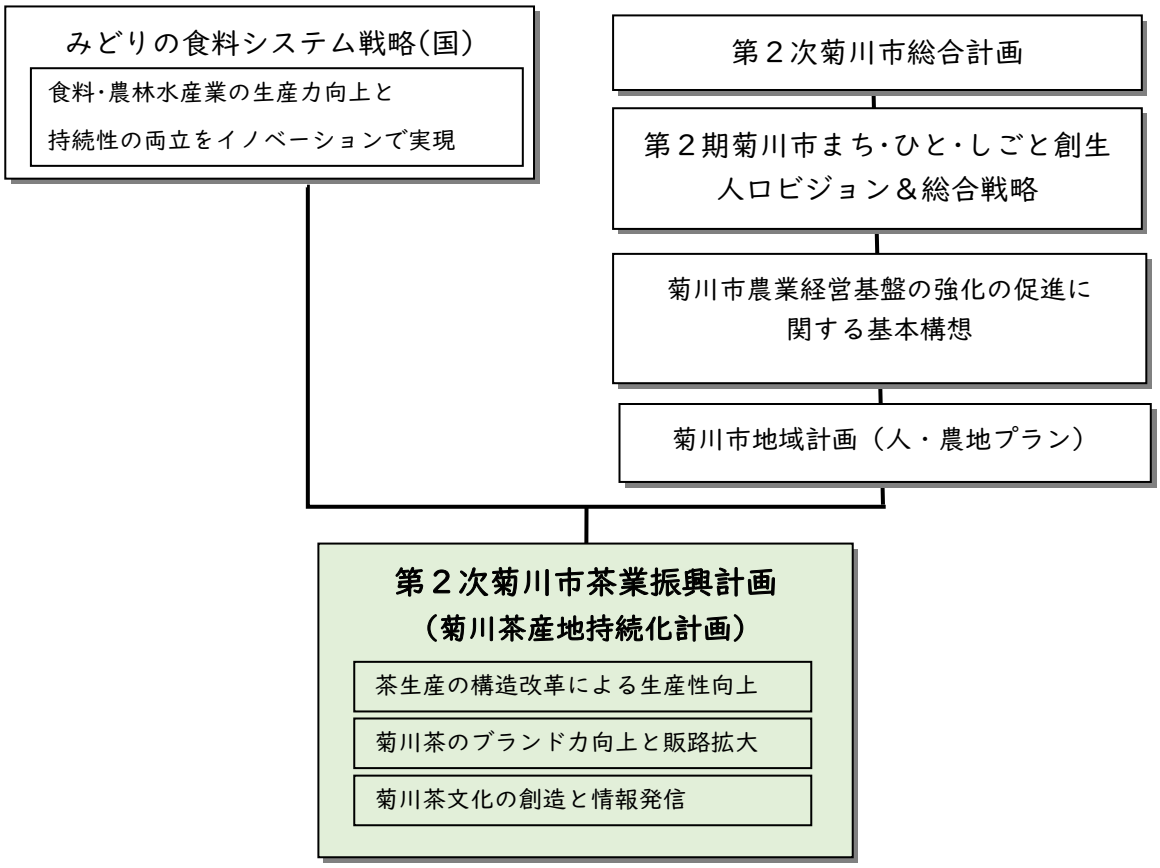
### （2） 計画の期間

本計画の計画期間は、2023 年度（令和 5 年度）から 2032 年度（令和 14 年度）までの 10 年間とします。

また、計画は、おおむね 5 年ごとに見直すこととしていますが、茶業を取り巻く情勢の変化などを踏まえ、必要に応じて、適宜見直すこととします。

## （３） 計画の位置づけ

本計画は、「第２次菊川市総合計画」をはじめとした関連諸計画との整合を図りつつ、本市の持続可能な茶業実現のための新たな指針として策定します。




## （４） 計画の協働推進

本計画は、菊川茶産地の名声と産地力を更に高めるため、生産者・茶商・ＪＡ・茶業協会・行政はもとより、菊川茶の振興に係わる団体やＮＰＯ等を含めた地域社会と茶業関係者が一体となって取り組む計画とします。

## （５） 菊川茶産地持続化計画の指標

【最重要指標】持続可能な菊川茶生産を可能とする茶栽培面積及び茶産出額

| | 現 状（令和２年） | | 目標（令和 14 年度） |
|---|---|---|---|
| 茶栽培面積 | 994.3ha | ▶ | 800.0ha |
| | 生産及び流通の構造改革、基盤整備、担い手の育成等を徹底して行い、経営面積の減少にブレーキをかけ、菊川茶の持続に必要な茶生産量を確保する。 | | |
| 茶産出額 | 22.7 億円 | ▶ | 32.0 億円 |
| | 有機栽培茶などの拡大、茶商と連携しての計画生産の実施、輸出の促進、リブランディングによる消費拡大策の推進等により収益性を向上させ、生産者の経営を安定化させる。 | | |

（茶栽培面積現状値：2020 年(令和２年)農林業センサス）
（茶産出額現状値：農林水産省令和２年市町村農業産出額データベース(詳細品目別)）

## 2 菊川市茶業の概要

### （1） 菊川茶産地の誕生

菊川市で本格的にお茶の栽培が始まったのは、鎖国が解かれた明治初期のことです。横浜開港によってお茶が輸出の花形商品となり、菊川市の東に広がる当時は雑木林であった牧之原台地が開墾され、お茶が植えられました。寝食を忘れて茶園づくりに取り組んだ開拓者の努力は百数十年の時を経て、今や大規模な茶園へと大きく実を結びました。

昭和の高度成長に合わせ、深蒸し茶の製法の開発、茶農業協同組合設立の推進、基盤整備事業の実施など茶業発展に向けた積極的な取り組みが行われたことにより、安定した生産体制が整い、全国有数の茶生産地としての評価が高まりました。

遠州のからっ風と恵まれた太陽の光の中で育つ菊川市のお茶の葉は、アミノ酸をたっぷりと含み、葉肉が厚いのが特長です。この茶葉でつくる菊川の「深蒸し茶」はとりわけ風味が高く、これまで多数の賞を受賞しています。

### （2） 菊川市茶業の産地基盤

牧之原台地の開拓に始まる明治、大正、昭和にかけた先人の苦労の積み重ねと、戦後のやぶきた種の導入が菊川市茶業の源と言えます。

1961 年（昭和 36 年）9 月には栽培から製茶を一貫して省力化した近代的な協業最新設備を備えた内田第一茶農協が県下トップを切って設立され、後に内田第二茶農協など急速な組織化への取り組みにつながり、多くの茶農協が設立されました。

1966 年（昭和 41 年）に小笠農業経済圏の指定を受け、菊川農協緑茶冷蔵庫や再生仕上工場など広域施設の建設を実施し、茶業の近代化に大きな役割を果たしました。

また昭和 40 年代には、パイロット事業や構造改善事業、畑地帯総合整備事業など各種補助事業を活用した茶園基盤整備が積極的に行われ、現在にみる乗用型管理機の著しい普及や集団的防霜施設の整備につながりました。

流通においては産地茶商が少なかったことから、市内で生産された荒茶はＪＡを中心に集荷と斡旋販売が行われました。1999 年（平成 11 年）に拠点として建設されたＪＡ遠州夢咲茶業振興センターでは研究、生産、指導、加工、販売の一貫した体制が整備され、茶産地の中枢を担い、今日の菊川茶産地を築いてきました。

### （3） 「深蒸し茶」発祥の地　菊川市のルーツ

1949 年（昭和 24 年）に六郷村農協茶業部が発足しました。

1952 年（昭和 27 年）、運営委員による「茶部」を廃止し、組合長管理下の農協直轄として翌年より茶業部を再発足しました。その苦難の時代の中で深蒸し茶が生まれました。

日照時間の長いこの地域のお茶は、山間地のお茶に比較して葉肉が厚く、味が濃厚で渋みが強いという特徴があり、標準製造法の蒸し時間では、甘い味を好む関東向け嗜好に適さない欠点がありました。そこで蒸し度を極度に進めて、この欠点をカバーし、また在来種茶園を優良品種のやぶきた種に改植することによって、濃厚な旨みのお茶を生み出すことに成功しました。

この「深蒸し茶」を生み出したのは牧之原台地の篤農家で、実証試験を重ねた末に蒸し度を強力に進める製造法の併用によって「旨いやぶきた茶」が完成しました。

これを六郷農協茶業部へ持ち込んだところ、神奈川の茶商に初めてやぶきたの価値が評価されました。

様々なお茶に関する書物には、「深蒸し茶」の発祥は、静岡県の「牧之原台地とその周辺」とされます。

# Ⅰ　基本方針と菊川市茶業の概要

相良物産（茶商）社長の山本氏は茶を長い時間蒸す製法を研究し、牧之原台地の周辺農家に勧めたとされる人物で、その深蒸し製法の研究に取り組んだ中心生産農家には、小松喜三次氏、丸尾雄彦氏、和田秀雄氏などの名が記されています。研究に関わった農家は他市にも存在したようですが、研究から生産出荷に至った農家として氏名が公表されているのは菊川市内の農家であり、今も流通する深蒸し茶の原点であることを自負してやみません。

深蒸し茶の看板

JR 東海道本線菊川駅南口広場

## （4） 菊川茶イメージキャラクター「ちゃこちゃん」誕生の経緯

「ちゃこちゃん」は 1991 年（平成 3 年）に菊川市下内田出身の漫画家「小山ゆう」氏に、菊川茶のイメージキャラクターとしてデザインしていただきました。

デザインされたキャラクターを基に名前の一般公募を行い、「ちゃこちゃん」という名前が選ばれ、命名されました。

当初にデザインされた「ちゃこちゃん」は、立ち姿でお茶の葉を手に持つ姿で、同時に、「おーい！竜馬」や「がんばれ元気」「おれは直角」などのキャラクターが描かれたＰＲ画 10 枚を寄贈いただきました。

1997 年（平成 9 年）には「小山ゆう」氏のご協力により、「急須でお茶をいれるちゃこちゃん」と「茶籠を手にお茶の葉を摘むちゃこちゃん」の 2 枚が新たにデザインされました。

市内外の多くの皆さんに愛され、茶袋やのぼり旗などに描かれて菊川茶のＰＲに活躍しています。

イラスト：小山ゆう

## （５） 菊川市茶産業の推移

### ① 茶生産の推移

静岡県の茶産業は、供給過多・需要減少により 1999 年（平成 11 年）を境に低迷が続き、菊川市における茶栽培面積（農林業センサス）も 1990 年（平成 2 年）の 1,746ha をピークに、2020 年（令和 2 年）には 994.3ha に減少しています。

近年の茶価低迷により、茶生産額も年々減少しており、生産者の収益性も大変厳しい状況にあることから、産地力の低下や耕作放棄茶園の増加につながっております。

今後、茶価の急激な回復が見込めない現状において、更なる生産性の向上やコスト削減が大きな課題であり、組織的な茶園の管理に向けた対策や一番茶に偏った生産から夏茶の付加価値を活かした生産や複合経営等の導入が求められています。

市内の茶栽培面積・生産量等

| | | 菊川市 | | | | 静岡県 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 茶栽培面積(ha) | | 荒茶生産量（t） | 生産額（億円） | 茶栽培面積(ha) | | 荒茶生産量（t） | 生産額（億円） |
| | | 国・静岡支局調査 | 農林業センサス | | | 国・静岡支局調査 | 農林業センサス | | |
| 昭和 | 50 | 1,560 | — | 4,360 | 54.1 | 21,200 | — | 52,989 | 699 |
| | 55 | 1,772 | 1,483 | 4,450 | 67.7 | 22,500 | 16,603 | 50,100 | 746 |
| | 60 | 1,877 | 1,716 | 4,560 | 69.4 | 23,000 | 18,024 | 48,000 | 778 |
| 平成 | 2 | 1,935 | 1,746 | 4,600 | 73.2 | 23,100 | 17,543 | 44,100 | 746 |
| | 7 | 1,884 | 1,703 | 4,070 | 70.7 | 22,000 | 16,882 | 40,300 | 744 |
| | 9 | 1,852 | — | 4,390 | 74.7 | 21,400 | — | 41,000 | 709 |
| | 11 | 1,849 | — | 4,450 | 86.3 | 21,000 | — | 39,100 | 807 |
| | 12 | 1,848 | 1,628 | 4,460 | 82.0 | 21,000 | 15,728 | 39,400 | 735 |
| | 13 | 1,847 | — | 4,260 | 74.0 | 20,800 | — | 39,300 | 662 |
| | 15 | 1,835 | — | 4,730 | 74.8 | 20,500 | — | 40,900 | 693 |
| | 17 | 1,740 | 1,519 | 4,840 | 69.5 | 20,200 | 14,731 | 44,100 | 652 |
| | 19 | 1,734 | — | 4,389 | 59.0 | 19,900 | — | 39,900 | 581 |
| | 21 | 1,700 | — | 3,980 | － | 19,200 | — | 35,800 | 450 |
| | 22 | — | 1,468 | — | — | 19,000 | 13,619 | — | — |
| | 26 | — | — | — | 38.0 | — | — | — | 356 |
| | 27 | — | 1,332 | — | — | 17,800 | 12,512 | — | — |
| | 28 | — | — | — | — | — | — | — | — |
| | 29 | — | — | — | 34.6 | — | — | — | 326 |
| | 30 | — | — | — | 32.7 | — | — | — | 308 |
| 令和 | 元 | — | — | — | 28.1 | 15,900 | — | — | 251 |
| | 2 | — | 994.3 | — | 22.7 | 15,200 | 8,907 | — | 203 |

（資料：静岡県　農林水産統計、お茶白書・農林業センサス）

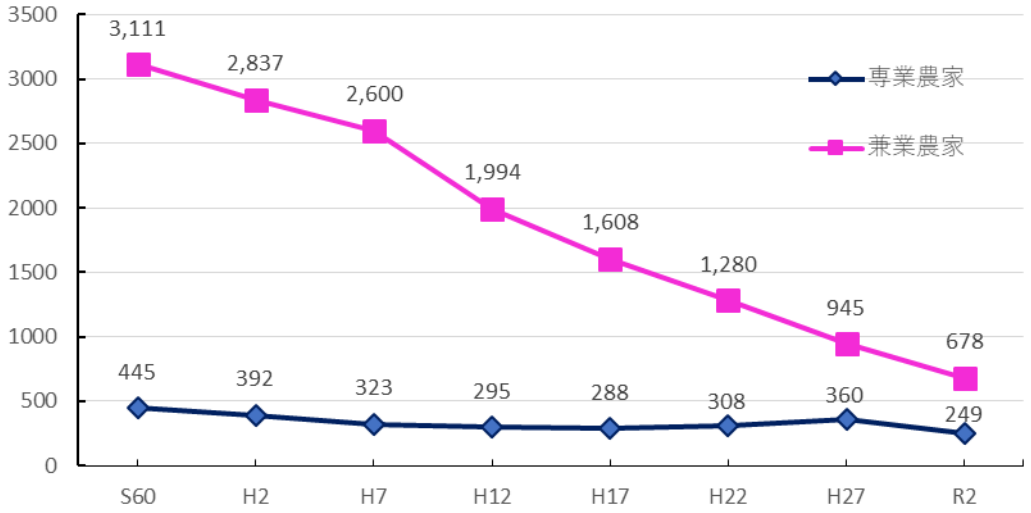
## ② 専業・兼業別農家数の推移

農業経営主の年齢構成は 60 歳以上が約８割を占めており、新規に就農する若者が非常に少ない現状では、今後も更に高齢化は進行していくことが予想されます。

市内の農家数は年々減少し、専業農家、兼業農家ともには大きく減少しています。

専業・兼業農家戸数の推移

（2020 年(R2)農林業センサスから主業･準主業･副業的農家戸数）




（資料：農林業センサス）

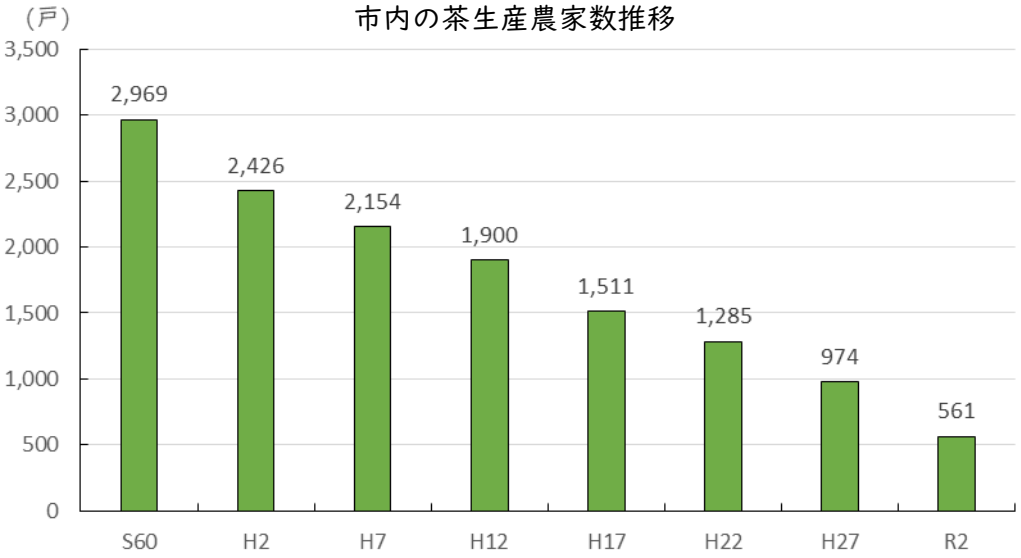
## ③ 茶生産農家数の推移

茶生産農家数は 2000 年（平成 12 年）から 2020 年（令和 2 年）の 20 年で約 6 割以上減少しています。

専業・兼業の二極化による経営規模・茶園管理技術の差、離農や高齢化に伴う茶栽培面積の減少や耕作放棄茶園の増加が加速しています。また、茶農協等においては進行する高齢化と農業従事者の減少により、摘採労務と茶工場労務の競合が大きな課題であり、茶農協の解散が見受けられます。

これからの菊川茶産地の生産力を維持していくためには、新規就農者に頼るだけでなく、現在就農している幅広い年齢層を含め、茶園を安定して管理できる仕組みを構築していくことが求められます。

市内の茶生産農家数推移




（資料：農林業センサス）